

■ 書評

井口貢編著
『観光文化の振興と地域社会』
(ミネルヴァ書房, 2002年)

戸 崎 肇 (明治大学商学部)

1. はじめに：本書の構成

本書は、観光を文化政策の側面から捉えるという画期的な試みを行っているものである。従来、観光は主に社会学の研究対象となってきた。それが、近年は地域振興のための経済政策論、あるいは地域経営論の一環として論じられる機会が多くなった。しかし、文化創造、伝統の保持・強化といった観点を主軸に据えて観光を捉えたものは恐ろしくなかったのではないかとと思われる。その意味で、今後新しい可能性を拓くものとして注目されるべきだろう。「固有価値としての地域文化を活かしたまちづくり、地域づくりにこそ観光振興の要諦があり、『観光振興は、観光客のためならず』といっているのではないだろうか」と言いきっているところに、編者の意気込みが感じられる。

本書の構成は、以下の通りである。

まず第Ⅰ部「地域振興としての観光文化の振興」で、観光に関する概論的な部分が展開されている。「観光と文化の位相」、「まちづくりと観光振興」、「観光文化立国の実現に向けて」といった章立てである。この中で、観光は次のように定義されている。

「ひとつの国（地域）の固有価値としての文化を、さまざまな諸相からよくみつめ学びとることであると同時に、自己の地域のかけがえない文化を外部の人に示し、みてもらい学んでもらうという行為である」

これは文化政策的観点から見た、これまでにない、非常に特徴的な定義であり、これまでの観光研究の観点到慣れたものからすれば、多少の違和感を感じざるを得ないものの、新たな立

場を鮮明にした、とても興味深い定義であると考えてる。

また、ここでは、第4章に「田舎町にとっての観光」という章が挿入されているのが特徴的であろう。これは恐らく、次に都市論が置かれていることに対しての配慮だと思われるが、章構成としては唐突のような感がある。また、内容も興味深いものがあるが、「中山間地域の農山村社会を称する意味で『田舎社会』の用語を用いる」という定義付けはあるものの、何をもって、どういう視点から「田舎」を論じようとするのか依然として不明確であり、その分析視角をより厳密に追求すべきであったろう。

以下は、具体的な地域の観光政策の紹介が続く。第Ⅱ部「都市を旅する」は、「アーバンリゾート再考」「『駅』が街になる」「茶屋町と観光文化」とある。ここからは、都市部とみなされる地域の文化政策的とみなされる観光政策が具体的に紹介されている。びわ湖ホール、高岡市の例、茶屋町としての金沢市の研究などである。どれもが興味深い観光政策の実践例となっているが、やはり羅列的な印象を免れない。都市について見るという点を、何らかの形で明確に規定した上で、各紹介事例をある程度統一的に論じた方が、読み手の概念把握につながるのではないかと考える。

続いて第Ⅲ部では、「技と産業という常在からはじまる観光」として、「地域文化の創造と観光振興」、「地酒文化と観光振興」、「陶芸に見る生活の芸術化」、「見て学び体験する達人の技」、第Ⅳ部は「そして、もうひとつの旅へ」という題のもとに、「秀吉の街の博物館都市構想」「『環境こだわり県』の博物館が、地域観光の拠

点に」「持続可能なエコツーリズムを推進するまちづくりの『場』」、「農村に芸術を訪ねる」といった、魅力に富んだ章名が並ぶ。そして、最終の第・部では、将来の観光のあり方を論じるものとして「高度情報化社会と観光」という題を設定し、「観光と情報」、「観光情報とインターネット」、「観光と福祉、福祉情報」といった題が設定されている。

2. 抽象化・一般化の努力

本書の魅力は、何よりも各地の実践例を、新たな観点から豊富に紹介している点である。このため、これから新たな視点で地域振興に取り組もうとする政策担当者や人々にとっては、格好の手助けとなる、1つのツールとなるものと思われる。

ただし、課題としては、何よりも、ここで紹介されている事例を、どのように抽象化し、すこしでも一般的な結論を導くべきかということがある。再度繰り返せば、各地の様々な取り組みを紹介することは、これから地域振興を行おうとするところが、新たな発想を見出そうという意味では大いに参考になることは確かである。しかしながら、これらの具体的事例を透徹する一貫した理論、実証というものを、すくなくとも最終部で整理しておくことが必要ではないだろうか。エリア・スタディーにおいては、往々にして事実の面白さゆえに、こうした抽象化の努力が疎かにされているように見えてしまうことが少なくない。こうした批判に応えるためにも、これらの具体例から何が言えるかを、単に読者の判断に委ねるのではなく、書き手としての一貫した視点を明確に提示すべきではないかと思う。

3. 今後のこの研究分野に期待すること

ここでは文化政策として観光を論じているので、当然のこととはいえが、その文化政策が最終的に目指すところは何なのかということ

再度議論したい。各地域固有の文化の再発見、継承、維持ということであれば、ここで述べられている議論は極めて正当なものである。しかし、ここに現実問題として深刻さを深めている「地域振興」という言葉を重ねるとき、どのような形で文化政策と地域振興が具体的に結びつくかを、より明確に示して欲しかった。つまり、地域振興が、現実の場面で何を観光に欲しているかということである。この点、日本の一般的な現実としては、ここでマス・ツーリズムの適否について論ぜざるを得ない。観光客の数が多くなって初めて関連産業が生き残ることができる面があるということも確かだからである。ここでは、観光産業自体の分析も求められることになる。

さらには、地域振興が、その地域の経済的向上を維持することを目的とするのであれば、その経済的向上とは何なのかということも問題となってくるだろう。もちろん、理想的には、地域経済の自律的発展、持続的発展ということが目指されるのであろう。しかし、現実には多くの地域経済が破綻の危機に直面している。このため、地域の要請は多くの場合、マス・ツーリズムによるわかりやすい地域経済の向上である場合が多い。こうした事態に対する見解も併せて提示すれば、本書の立脚点がより明快なものとして浮かび上がってくるだろう。

本書の最初の方で、学問の在り方に関して白幡洋三郎氏がいった以下のような言葉を紹介している。『『ここが良い、ここを伸ばせ』が学問の大事な目的の一つであり、『ここが悪い、あそこが悪い』と指摘するだけでは、たとえ当たっていたとしても、それは研究の全段階でしかない。』

しかし、この言葉が、新しい領域だからといって、そこに籠るといった「逃げ」にならないように願う。新しい分野の開拓には、従来の見解との相克を乗り越えるという大きなハードルが否応なく待ち構えている。特にこの分野では、経済政策的、社会政策的に論争課題が多く存在している。たとえば、観光政策の推進が文化の

変質をもたらすことをどう考えるか、といった問題である。そうした論点との融合を積極的に図っていくことを願う。観光学研究における今

後の非常に有望な新分野として、これからの総合化、深化を期待するものである。